令和６年度入学試験問題（学校推薦型選抜）

小　論　文

初等教育教員養成課程
人文・社会教育プログラム

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること。

〔問〕　次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

メタ倫理学とは、倫理についてのそもそもを問う学問である。しかし、そもそも、という言葉はなかなか厄介な言葉である。日常生活でそもそもと言い出すときは「そもそも、それ買う必要なくない?」とか「そもそも問題設定がおかしいのでは」という風に、たいてい否定的な言葉が続くし、すぐにそんなことを言う人はだいたい煙たがられる。というのも、「そもそも」はちゃぶ台をひっくり返す言葉だからである。ここまでは共有できているよね、という暗黙の前提、主張の土台をひっくり返してしまうので、これが繰り出されるたびに議論はどんどん結論から遠ざかる。「そもそも」とばかり言っている人は批判ばかりで、非生産的だと誹(そし)られることもしばしばである。

あるいは、現に何らかの道徳を身につけている人、たとえば嘘をつかず、他人の幸福を心から願うことができる、優しい性格の人からすれば、「そもそも私たちは正しいことをしなければならないのか」などという問いは、「机は本当に存在するのだろうか」という問いと同じくらい、馬鹿馬鹿しいものに見えるかもしれない。私たちにとって机が存在するのが当たり前であるのと同じくらい、彼らにとって、困っている人を助けることが善いことであり、それをしなければならないのは当たり前のことだろう。現に私たちの多くは、多かれ少なかれ、何らかの倫理や道徳を身につけているのだから、そんなことを問題にしていったい何の意味があるのか、と問われることもしばしばである。

メタ倫理学の非生産的な装いは、規範倫理学や応用倫理学と対比するとさらに際立つ。応用倫理学は実際に現実の問題を扱っていて、個人の生き方へのアドバイスから、企業活動の指針の提示、果ては国家や国連の政策立案にすらかかわっている。規範倫理学はそうした応用倫理学における善と悪、正と不正の規準となる考え方を供給している。その意味ではどちらも私たちの生活に直接の影響を与えうるものである。他方、メタ倫理学は、そもそも、そもそも、と言いながら正しいという言葉の意味を延々と論じるばかりで、一向に私たちの役に立つようなことを教えてくれないように見える。

では、あらためて、倫理や道徳の「そもそも」を問うメタ倫理学にはどんな意味があるのだろうか。言うなれば、メタ倫理学のそもそもである。おそらく、メタ倫理学の役割は、大ざっぱに言って二つある。

メタ倫理学の一つ目の役割は、私たちが様々な倫理や道徳にかかわる問題について考えたり、ときには議論を交わしたりするときの土台を整理して、議論の道筋をはっきりさせることである。

倫理というのは、私たちがそれなしには生きられないようなものであり、私たちの日常に深く根づいたものである。そのために、私たちは誰しも倫理や道徳に関する自分の意見をもち、それを語ることができる。しかし、私たちはそこで現れる概念や言葉の意味をいつでも十分に理解しているわけではない。その多くは家庭で、学校で親や教師から習ったことや、どこかで聞きかじった誰かの台詞の受け売りだったりするのだ。

もちろん、きちんとは考えたことがなくても、私たちはなんとなくそうした言葉を使うことができる。だが、たとえば生命倫理と言われるような、自分や家族、誰かの生き死にがかかる場面で、自分でもよくわかっていない曖昧な概念を使って、大事な決断を下してしまってもいいのだろうか。「臓器移植、許諾する書類にサインすることがきっと正しいことなんだよね．．．」と言うとき、本当に「正しい」という言葉がどういう意味をもった言葉なのかをじっくり考えなくていいのだろうか。大変な苦境の中でも道徳的に正しい決断をしようと思うなら、そもそも道徳って何なのか、こんなに苦しいのにどうして道徳的に善く振る舞わなくちゃいけないんだろうか、ということを一度は考えてみる必要があるのではないだろうか。

これが複数人での対話ということになれば、別の意味でその重要性は顕(あら)わになる。たとえば、それぞれが誠実に同じ言葉を使っていても、実際にはそれが指しているものが違っていると、議論はおよそかみ合わないものになる。全員が道徳や倫理、善と悪、正と不正などの言葉で同じことを意味しているとは限らない。捕鯨の問題を例にとってみよう。日本人が行う捕鯨をめぐって、「鯨を殺して食べることは残酷であり、不道徳だからやめるべきだ」という主張と、「捕鯨は日本の伝統文化であって残酷ではなく、不道徳でもない、やめる必要などない」という主張がぶつかり合うことがある。このとき、両者の前提としている道徳の理解が違っているせいで、議論がかみあわないということがしばしばある。

たとえば、前者が「文化や時代を超えてどんな人でも従わなくてはならない共通で普遍的なもの」を想定し、後者が「人や文化によってそれぞれ違うもの、別の文化に

属する人々に自分のものを押し付けてはいけないもの」を想定して、それぞれ道徳という語を用いているとすれば、二人の「捕鯨は道徳的に許容されうるか」という議論はかみ合っているように見えて、実際にはまったくかみ合っていない。この場合にまず考えねばならないのは、鯨を食べること自体の是非以前に、道徳は文化を超えるようなものであるのか、言い換えれば普遍的なものであるのか、である。そのことがわかれば、相手の言い分もより深く理解することができるし、なぜ議論が進まなかったのかもわかる。そして、それを通じてより生産的な議論へと進んでいくことも可能になるだろう。そのようにして、道徳における思考や議論の前提のずれを整理し、解消する方向へ向かわせるのも、メタ倫理学に課された重要な役目の一つである。

そして二つ目のメタ倫理学の役目は、私たちが引き受けている道徳や倫理を見直すきっかけを提供する、というものだ。メタ倫理学の仕事は、基本的には、私たちの倫理についての考え方や、考える際に使っている道具の意味を顕わにし、解きほぐしていくことである。そうした考え方には私たちが普段から意識しているものもあれば、逆にまったく気がついてないもの、暗黙の前提となっているものもある。確かに、そうした前提の多くは、様々な思考の労力を省いてくれる役に立つものである。1+1は本当に2だろうか、といちいち疑っていては、複雑な計算などできはしない。

しかし、暗黙の前提の中には、固定観念や偏見、先入観というような否定的に捉(とら)えられるものも多い。そして、私たちは日常生活を送っている中で、気づかないうちにそうしたもので自分や他人を追いつめてしまっていることがある。たとえば、典型的なものが「すべき思考」である。「長男なのだから、しっかりすべきだ」「女なのだから、女らしくすべきだ」「こんな簡単なことはできてしかるべきだ」「熱があるくらいで仕事を休むべきではない」「これくらいのことでいちいち、くよくよすべきでない」と、私たちは自分たちがなすべきことを決め、義務を課しては、それが達成できないことに強烈な痛痒(つうよう)や後悔、怒りやイライラを覚える。

そんなとき、一度立ち止まって自分の考え方と距離をとることは、こうした「すべき思考」や義務のもたらす息苦しさ、生きにくさを抜け出すための手がかりとなりうる。そもそも「べき」とか義務とはいったい何で、いったいどこから来るものなのだろうか。たとえば、メタ倫理学の基本的な考え方の一つとされるものに、「である」から「べし」は出てこない、というものがある。「〜は〜である」という事実から、

直接に「～は～すべきだ」という倫理的な結論を導き出すことはできないという規則だ。

この規則が正しいとすれば、「私は長男である」とか「私は女性である」という事実から「私は長男らしくしっかりすべきだ」とか「私は女性らしくおしとやかにすべきだ」などの倫理的な結論は出てこないことになる。私は事実として長男であるかもしれないが、それでも長男らしく振る舞うかどうかは私自身が決めることである。そうすると、これによっていきなりすべての義務から完全に解放されるということはないとしても、少しは気が楽になるかもしれない。その意味で、メタ倫理学の考え方に触れることは、視野を広げ、先入観や思い込みを気づかせくれる一つのきっかけになりうるのである。

そしてこの見直しは、やや大げさに言えば、私たちの世界観に影響を与えることもある。本書でも扱うメタ倫理学の問い、「そもそも倫理の問題に本当に正しい答えがあるのか」という問いに、どう答えるかということは、ときに人生や世界を左右するようなことになりうる。たとえば、今の問いに対するもっとも極端な立場をとれば、倫理の問題に答えなんてない、そもそも善いも悪いもない、だから何をしたって構わない、ということになるかもしれない。逆に、本当に正しい唯一の答えが存在するということになれば、息子を神への生け贄(にえ)に差し出したアブラハムのように、そこで課される義務がどんなに辛く、苦しいものであったとしても、それに従って生きねばならないということになるかもしれない。メタ倫理学的な観点からの道徳の見直しは、まさに私たちの生き方の見直しにもつながるのである。

出典　佐藤岳詩(2017)『メタ倫理学入門－道徳のそもそもを考える－』勁草書房

(注)　問題作成の都合上、表記の一部を改めたところがある。

（問 1）　文中にあるメタ倫理学の学問的役割について説明しなさい。

（問 2）　私たちの社会には解決すべきとされる問題が多い。それらの問題のうち、文化・環境・社会生活に関するものから、1 点を選び、まず議論するために必要な問いを、文中にある下線部のように疑問形で設定しなさい。次に、あなたが取りあげた問題の解決に向けて議論を展開するうえで、踏まえるべき「そもそも」を 600 字以内で論述しなさい。